

【論文】

在日定住中国人女性の居場所とホーム —ライフヒストリーの分析から—

陳 思羽

I 研究の背景と目的

グローバル化が激しく進行する中で、世界的な規模での人の移動、国境を越えた人の移動が活発になっている。先進国の中では最も早く、少子高齢化という世界的な潮流の中で大きな社会変化を迎えている日本では、母国から日本に移動し、文化や言語さらには人種が違う環境の中に生活をしている「外国人」を受け入れるという課題がだんだんクローズアップされてきた（井口2001, 駒井2002, 石井2003, 依光2005）。この問題については、多文化共生社会を推進することが非常に重要であると考えられている（宮島2003, 駒井2006）。

多文化共生社会とは、国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化の違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていく社会である（総務省2006:5）。日本では、外国人の定住が進む中、総務省や各自治体で多文化共生への取組みが開始され、その政策にも徐々に進展が見られるようになってきている。しかし在日外国人がどのような日常を送っているのか、そこでどのような悩みや課題を抱えているのかといった問題について、その内面にまで焦点を当てた研究は多いとはいえない。本稿では、定住する在日中国人女性のライフヒストリーの分析を通じ、「居場所」や「ホーム」の視点から、この課題にアプローチすることを試みたい。

ホームがあるかどうかと聞かれると、物理的な「家」を想起する人が多いかもしれない。英語のhomeは、中国語で「家」と訳される。中国語では「我家」という単語が良く使われるが、これは一つには家庭のこと、家族のことを指し、もう一つは「場所」という概念も含まれる。1930年代に中国の作家巴金（ばきん）は、『家』という作品の中で、家族の発展の流れが展示される場所として「家」という概念を用いた。ホームには現在の家・家族、中国の家族、地域社会、中国や日本という国家まで、いろいろなスケールがある。人々が一つのホームから他のところに移動すると、新しいホームを形成するまでの過程に伴い、アイデンティティや自分の意識も変化していくことになる。

人文主義地理学では、場所やホームをめぐる議論が核心

的位置を占めている（Cresswell 2004）。場所やその意味を深く考える上で、最も親しみやすい例としてしばしばホームが取り上げられ、その意味に焦点を当て、心地良さや所属感を感じるようなホームがどのように経験され、表象されてきたかについての理解が深められていったのである。ホームは多様なスケールの中に、位置づけられるものである（Blunt and Dowling 2006）。「住まい」は個人および地域の構成員としてのアイデンティティの基礎であり、ホームはプライベートで個人的な場所として、自らの存在の核として位置づけられてきたのである。ホームを考えるとき、ジェンダーの視点が肝要であることは言うまでもない。英語圏の地理学においても、フェミニスト分析の枠組みが、ホームの地理学研究に影響を与えた（吉田 1996）。男性にとって癒しの場所であるホームは、女性にとっては、労働の場であるとともに、社会的再生産の場であり、また女性抑圧の場ともなりうる（熊谷 2015）。さらに、「ホーム」と移動性・流動性は対極にあるものではなく、表裏をなすものとしても注目されている（福田 2008）。

女性は、一般的に結婚、出産、育児、親族の介護、夫の転勤などさまざまなライフイベントを通して、生涯で帰属する場所が男性より複雑に変化するように思われる。この過程において、居場所とホームの感覚も移動と結びついて変化していくものと考えられる。

II 在日外国人をめぐる制度と在日中国人の現状

1. 永住権と帰化

日本の入管法による「永住」は、外国人の永住許可申請を法務大臣が承認した場合に、その外国人に「永住者」という在留資格が与えられるものである。永住者は在留期限のない在留資格であるため、更新の必要はなく、また活動の種類にも制限はない。これに対し「帰化」とは、日本国籍を有しない者が日本国籍の取得を望む申請をした場合に、日本国が許可を与えることによって、日本国民としての地位（日本国籍）を賦与されるものである。このように、永住は外国人が外国人であることを前提とする在留資格制度上の問題であるのに対し、

帰化は外国人が日本人になるという国籍の問題であるという点に根本的な相違がある。

永住者は外国のパスポートを持つが、帰化した場合は日本国の戸籍が作られ、日本のパスポートを持つ。この違いが、重要な意味をもつ場合がある。それは、就職や、ビジネス上の問題である。子弟の就職の際に、外国籍が不利に働くことを考慮して家族で帰化する場合は現在も少なくない。また、勤務先の事情で頻繁に出張する相手先の国との関係で（たとえば本国籍ではビザの取得が難しいが、日本の旅券を持っていれば査証免除で行ける）、事実上勤務先の会社から帰化を勧められる場合もある。

2. 在日中国人の基本状況

2016年の在日中国人の人口は、67万7571人である（総務省HP）。その約4割は就業制限のない永住者（21万9557人）や定住者（2万6537人）である。制限のある在留資格としては留学10万1051人（1位）、技能実習9万6120人（1位）、技術・人文知識・国際業務5万9755人（1位）が多い。この他に調理師などの技能（1万6715人）、経営者（7318人）、転勤（5778人）や研修（244人）、教授（1661人）、研究（516人）や高度専門職（369人）、文化活動（755人）が在日外国人の中で最も多く、芸術（69人）も米国に次ぐ第2位である。在日中国人は在日外国人の総数の3割を占めているが、医療（76%）や高度専門職（66%）、技能実習（53%）は在日外国人の半分以上、技能（48%）や経営（45%）、技術・人文知識・国際業務（45%）や留学（45%）なども、在日外国人の4割以上を占めている。

III 在日中国人女性のライフストーリー

1. 聞き取り調査の経緯と方法

筆者が2013年に来日してから、日常生活で出会った中国人女性は多くなかった。その後、外国人ツアーを企画する旅行会社でアルバイトをするようになり、そこで出会った仲間の紹介を通して、A氏とD氏にインタビューした。また中国で流行っているSNSであるWEIBO（FACEBOOKと同じ機能）でB氏、C氏、E氏、J氏と出会った。さらに2014年の11月にお茶の水女子大学大学院地理環境学コースの地域調査方法論演習で、初めて岩手県陸前高田市を訪問した際に、そこで災害FMラジオに出演しているF氏と出会った。そしてF氏の紹介を通して、G氏、H氏、I氏にインタビューした。

聞き取り調査は、半構造化インタビューのかたちで行なった。インタビューは中国語で行なった。インタビュ

ー時間は2時間程度である。

インタビューを、調査者と調査対象者の共通の母語である中国語で行なったことにより、対象者の心情の奥底まで聞き取ることができたと感じる。話し言葉を文章にするときに、説明が少し不十分と思われるところは、話し手の真意をより伝えるためにこちらで言葉を補った部分もある。しかし、ほとんどは話された言葉をそのまま記すよう努めた。少し不安が残るのは、インタビュー内容を、自分の翻訳で日本語に置き換えたとき、その人らしい言いまわしや細かいニュアンスをどれほど汲み取ることができたか、という点である。そのため、日本語として文法的には多少おかしい表現も、その人なりの表現や雰囲気を生かすため、あえて用いた箇所もある。

インタビューの共通の質問事項は、以下のとおりである。1) なぜ日本に来たか。来日の経緯・来日目的・日本での生活経験の確認；2) なぜ永住権を得た／帰化したのか。か。在留資格とその変化による影響の確認；3) カルチャー・ショックをどう感じたか。自分(子供)のアイデンティティについてどう思うのか；4) 居場所についてどう思うか。；5) 結婚後、出産後、アイデンティティがどのように変遷していったか；6) 今後の人生に対してどのような考えがあるか。

2. 4名のライフストーリー

本研究ではあわせて10名にインタビューを行なった。10名の属性は表1に示したとおりである。このうち来日の動機により、①留学生として来日した者、②国際結婚により来日した者、の二つのグループに区分して考察を行なった。以下では、インタビューした10名のうち、4名の対象者について、そのライフストーリーの一部を紹介する。

1) 留学生から日本社会へ

①A氏（年齢：38歳、出身地：遼寧省瀋陽市、在留資格：永住権、配偶者の国籍：中国）

中国の大学を卒業してから、日本で言語学校に通って、大学院に入学しました。卒業してから、ただ仕事を見つけてみようと思って、本気に日本に住み続けるなんて考えなかった。そして、彼氏(中国人)が先に就職先を決めたので、私が彼と離れたくないので、自分が頑張って就職しました。振り返ると、日本で進学する時と就職する時は、自分が一番頑張ったところでした。

10年前の時期の私たちの年代と、あなたたちと全然違いますよ。2000年に日本に来た時には、円高だったので

表 1 調査対象者10名の属性

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
年齢	30代	30代	50代	30代	40代	30代	40代	50代	50代	30代
出身地	遼寧省瀋陽市	上海市	遼寧省瀋陽市	河南省洛陽市	新疆省ウラムチ市	遼寧省瀋陽市	黒龍江省ハ爾濱市	黒龍江省ハ爾濱市	黒龍江省ハ爾濱市	北京市
来日経由	留学	留学	留学	留学	留学	結婚	結婚	結婚	結婚	結婚
滞在経験	留学-就職	留学-就職-主婦	留学-主婦-バイト	留学-就職	留学-就職	結婚-主婦-就職	結婚-就職	結婚-主婦	結婚-農民-バイト	主婦
職業	会社バイト	主婦・自営業	会社バイト	会社バイト	不動産会社・正社員	私営病院・正社員	正社員	主婦・農民	主婦・農民	主婦
学歴	日本の大学院卒	日本の大学院卒	専門学校卒	日本の大学院卒	日本の大学院卒	中学校卒	中学校卒	中学校卒	中学校卒	中国の大学卒
居住地	東京都	神奈川県	東京都	東京都	東京都	岩手県・陸前高田市	宮城県・登米市	宮城県・登米市	宮城県・登米市	埼玉県・大宮市
婚姻状況・配偶者国籍	既婚・中国人	既婚・日本人	既婚・日本人	既婚・中国人	既婚・中国人	既婚・日本人	既婚・日本人	既婚・日本人	既婚・日本人	既婚・日本人
子供	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人	二人	一人	二人
来日年数	14	10	28	12	18	18	18	18	10	5
在日年数	永住権	帰化	帰化	永住権	永住権	永住権	永住権	永住権	永住権	永住権

(筆者作成)

本当に大変でした。ただ両親の仕送りでは、自分が日本で生活できないですよ。2000年に私の両親の給料が二人合わせて毎月2,000円で、当時のレートで計算すると3万円ですよ。

だから、当時はバイトしないと自分の生活が保証できなくて、深夜のバイトをやったら、昼間の授業が元気があまり出なくて、悪循環になりました。このせいで、自分は（中国では）日本語学科でしたけど、言語学校で2年在学しました。バイトしながら、大学院の学費を貯金しました。そして、2004年に私が国立大学の大学院に入学して、奨学金をもらってから、ずいぶんよくなりました。

卒業してから私は一時帰国しましたが、中国で仕事を探して見ようと思って、研修でしばらく働きましたが、仕事より、会社と人間関係に慣れなくて、やめて日本に戻りました。戻ってから彼氏と結婚して、子供を出産しました。子供を出産してから、自分と夫が忙しくて、育児ができないので、ちょうど夫の両親が面倒を見てくれて、子供を中国に送りました。子供に対してかわいそうかもしれないですが、経済と子育てを両立できない私たちにとって、それ以外は選ぶことができなかった。その時私は娘に会いたいと思って、毎日泣いていました。ようやく幼稚園に入れる年になって、日本に迎えました。

中国の大学の同級生たちは大手企業や政府で管理職を担当しています。これは日本にいる私たちと比べると、もし出世できるかどうかを重視したら、絶対帰国する方がいいと思う。この10年に中国の発展がすごく速かった。でも私の青春が日本にあったので、思春期で立ち上がった価値観や、物事に対する考え方は全部日本で形成し

たので、私にとって帰りたくても、帰られないですよ。卒業してから帰国の1年の間にも、こういう感じでした。自分が中国での職場環境が合わないと感じました。

日本に戻ってから、環境が私と合うかではなく、私が環境に適応すべきだと反省しました。日本で暮らすと、時々困って、諦めて帰国しようと思っても、冷静に考えるとそれは日本での生活が苦しいではなく、ただ当時にあったことが大変なだけかもしれない。そう考えると自分ももっと積極的に頑張って続けた。特に娘も日本に迎えて一緒に住むと、家族がいるという責任感を持つようになりました。今も自分が娘のために頑張っていきたいと励んでいます。

娘は4歳まで大部分の時間は中国で過ごしましたが、日本に来てから日本語を勉強し始めたばかりなのに、今では中国語より日本語が上手になりました。子供の周りの友達が日本の子ですので、日本語がもっと容易に上手になれるかもしれないよね。自分のアイデンティティを彼女に聞いたら、自分は中国人ですけど、家は日本である。中国に帰っても、旅行みたいにならず戻ってくると答えてくれた。両親が聞いたらいつも「中国を忘れていけませんよ」と返事しますが、娘はあまり気にならない気がする。

今夫が残業多いので、子供となかなか会えない。日本でお母さんが仕事しながら、子育てをやると、なかなか両立できない気がします。…都市の方は共働きの人が多い。若い人は家事を一緒にやります。でも男の人は、やるんじゃなくて、少し手伝おうという感じしかない。漢民族の人、女の人強いよ。男の人、家事かなりよくやります。日本の女の人が、この面の悩みを持っているでし

よう。私が、日本に来てからも驚きました。日本は科学や技術がこんな進んでいるけど、けっこう古い考え方を持っていますね、大勢の人が。

日本で住んでいると中国より悩みが少ないと思います。たとえば、子供の就学のことについて、子供が頑張ればいい学校もいけます。中国で上質な教育を受けることは、激しい競争を伴うことだよ。…高校を卒業から大学に入るまで北京大学や清華大学のようなトップの大学はさらに1/10000の競争率に至ります。私たちがこの経験があったので、その大変さがどれほどかちゃんとわかっています。中国でみんなが同じ進学試験を受けてから成績順で、学校を志望するので、自分の成績に基づいて、理想な学校を出願しますよね。三つの学校を志望可能ですけど、もし落ちたら、入学資格を失ってしまいます。これに対して、日本の方が楽ですよ。

永住権をとる前に自分が留学のビザから夫の家族滞在ビザに変更しました。今、永住権をとっても、前と比べて、大きな変化は感じなかったのですが、ただビザの更新を心配することがなくなりました。そしてある程度、ほっとしました。うちの娘は日本語、中国語、英語を話せます。将来娘が行きたい国に行かせるため、私が今頑張っています。娘にとって、両親が留学した経験があるからこそ、彼女も留学すべきだと私がそう思います。日本は本当にいいところですが、親の気持ちから考えると、外国人として大変でした。もっと過ごしやすい国に行かしたいです。

自分の両親に対しては、本当に恥ずかしくて心が痛む。私と夫もよくこの話をしますが、将来いつか必ず帰国しよう。当時私が留学に行かせるため、両親が節約しながら、一所懸命貯金していて、今私が日本で安定したのに、両親がまた心配していて、自分のためにお金がかかるのが悔しくてならない。私が母親になってから、この親心がやっとわかるようになりました。出産した後、4年間子供の面倒を見てくれて、今離れても孫の将来を心配しています。両親が病気になった時だけ、介護するため帰国します。仕方がないですよ。両親もいろいろ考えてくれて、窮屈な思いをさせたとします。私が一人っ子なので、両親が今すごく寂しくなると感じています。従兄弟が時々両親の面倒を見てくれて、すごくありがたいです。今の娘も一人っ子で、娘がそばにいないと、その寂しさをとても感じられます。もう一人の子を産みたいですが、でも今の経済力と体力から考えると、嬉しいよりは心配なことが多い。

日本での滞在生活はいろいろ教えてくれましたが、自分の夢のために努力すべきことと、妥協すべきところは

無理やりをやめること。バランスをとって、焦らずに落ち着いて一步一步に成長することなどなど。人生は正しいかどうかで判断するのではなく、自分が満足できるかどうか、一番大事ではないでしょうか。

家庭は私の居場所だと思います。今インターネットでSNSが便利になって、知らない人とWEIBOで繋がって、友達とWECHATでグループを作ってもいつでも連絡できます。さらに電子マネーが流行っていて会えなくても、礼金や新年のお年玉を全部あげるの、以前のように顔を会わせないと社交できない状況よりは結構便利になりました。このおかげで、中国にいる中学校、高校の友達とSNSで何でも話せて、距離が縮まりました。居場所といえば、家庭や、友達とのグループが全部そういえます。

将来は私が両親のためにいつか帰国するかもしれないですが、これから5年以内には帰れないと思います。

② D氏 (年齢:34歳, 出身地:河南省洛陽市, 在留資格:永住権, 配偶者国籍:中国, 子供:1人)

私は2000年来日しました。中国で専門学校から卒業して、お兄さんが日本にいたので、海外のことに対して興味がある私も、日本に来ました。1年2か月間の語学学校を終えて、大学に入学しました。最初大学院に行きたかったのですが、難しくて諦めました。大学を受験するために高校の数学や国語をもう一度日本語で勉強し直し、一所懸命に頑張りました。大学を卒業してからある旅行会社に就職しました。でも、正社員としてもビザのサポートがないので、私のビザを留学から夫の就職ビザを使って、家族滞在に変更しました。家族滞在は勤務時間が28時間の制限があるので、妊娠してから、旅行会社の仕事をやめて、主婦になりました。

娘を2011年に出産しました。2011年に東日本大震災が発生して、放射能があるという話がずっとインターネットで広がり、念のため、私はあまり出かけなかった。水が放射能に汚染され、飲めないという噂が出てきて、スーパーで赤ちゃん用の水が売り切れてしまい、野菜や牛乳などの日常食品が確保できなくて、妊娠28週の飛行機の乗機制限の前に、一時帰国しました。帰国まで日本で6年ほど住んでいた私が日本に住み続けるかどうかに対して、初めて迷いました。帰国して、出産待ちの日々に両親にいろいろ世話になって、出産してから、子供を見てくれて、留学してから一番楽な時間でした。なぜ中国に戻ったかという、震災の時に妊娠して、本当に怖かったからです。そしてなぜ子供を産んだ半年後日本に戻ったかという、私はこの11年の全ての努力を無駄にしたくないからでした。出産する時に、私が32歳、そのま

まで帰国したら仕事も見つけられなくて、難しい年齢でした。それでも、私は日本が好きではないというわけではなくて、ただリズムが速すぎるだけで、慣れたら住み心地が良いところだと思います。それで、娘が6カ月の時に連れて日本に戻りました。

しかし、子供が保育園を探す時にまた問題がありました。最初に気になった保育園に応募しようと思って、ポスターがまだ貼ってあるのに、電話で尋ねると、もう満員になったと返事をくれました。私の日本語が上手ですけど、発音がそんなに綺麗ではないので、話すとすぐ外国人であると分かるようになったので、この原因で差別されたのではないかなあと私がそう思いました。でも、夫の発音が綺麗なので、代わりに夫が連絡を取って、カナダ人が営んでいる保育園に入りました。英語系なので、学校で日本語と英語を両方とも教えてくれて、すごく嬉しかった。おかげで、今の娘は3カ国語が話せるようになりました。娘が中国語を忘れないようにと、家で日本語を使わないようにして、全部英語と中国語で話します。私と夫の英語は勉強し続けているので、日常会話は大丈夫です。私は娘が入学してから、時間があつたので、家事を兼ねてやるために、正社員ではなくて、バイトをやり始めました。

夫が貿易会社で働いて、一所懸命に頑張ったので、昇進が速くて、今支社の部長を務めています。でも、仕事を集中すると、娘のことに對して、あまり時間を取れなくなりました。最近、それが気になった夫が出来る限り娘と交流出来るチャンスをつくって、私が朝からバイトがありますので、夫が会社と相談して理解をもらいました。夫は毎日午前11時に出勤して、20時に退勤するパターンになりました。私たちがこのような苦労して、理由としては娘に明るい将来を与えるためですよね。娘が大学に入るから経済的に保障され、自分の将来を選ぶ自由があつてほしい。将来アメリカに行きたいなら、アメリカに行って、ヨーロッパに行きたいならば、ヨーロッパに行っても構いません。このような経済力があることを目指しています。もちろん日本に住みたいのであれば、私も反対しない。子供に十分な自由をあげたいです。

もともと私はお兄さんがいるので、日本でなんとなくお互いに頼れる人がいますが、お兄さんが帰国してからは、一人で日本にいと、たまに寂しいと感じています。この感じは夫と娘のような家族の感情ではなく、日本で実家を無くしてしまったような感じです。でも、お兄さんが帰国してから、両親を見てくれる人がいると安心しました。

私と夫と一緒に永住権を取った翌日にすぐマンション

を買いに行きました。自分の家があると落ち着けるところができたと実感しました。自分が商売を計画しているので、その分の予算を除いて、30年のローンを申請しました。30代の私たちにとって人生の中でストレスが一番たまっている年だと思います。日本でのこの10年間、自分が1日でも休まずに、ずっと走っている気がします。日本は私が成長できたところだと思います。人生ただ一度なので、日本に来ないとどうなったか私もよくわかりませんが、国内の友達と比べると、多分彼たちよりは大変でした。個人によって気になるものが違うので、私が充実した人生がほしいので、日本に来たことを後悔しない。子供に對しても、生活しやすいところだと思います。でも、今心配しているところもあります。将来娘が小学校や中学校に入ったら、外国人としての彼女は慣れるかなと不安です。ドラマでいじめとか差別とかよくあるのではないですか。それを見たら想像するだけでも怖いと思います。だから、私が外国人として日本であつた経験と学んだことを先に娘に教えたい。娘は心が強い人になってほしい。

今保育園のイベントで、外国人のお母さんが多いので、みんなが熱心で関係が良くなりました。私にとっての居場所は家族だと思います。職場で出会った中国人同士が多いけれども、生活の面で関わっているところが少ないです。私が結婚したので、みんなが企画していたイベントに参加したいけど、時間がなかなか取れなかった。職場では自分の価値を生かせるところかもしれないですが、自分の居場所とはいえない。日本が住みやすいところだと話しましたが、なぜかという自分の考えですが、人々がお互いに提携して、社会のネットワークが作られているからだと思います。たとえば、保育園に任せても、自分がちゃんとやるべきことがあります。連絡帳とか、先生との連絡が密着で、子供が安全な環境が作られています。中国では全部保育園に任せて、子供はミスがあれば連絡が来ますが、普段でただ年2回の間例会を行うだけで、学校と父母両方のネットワークができてないので、不備なことが発生しやすいです。だから、子育てであっても、仕事であっても、努力しないと成果が出て来ないことです。同じ年代の友達と比べると海外に住んでいる私の向上心が一番強いかもしれない。

2) 国際結婚から日本社会へ

③ F氏 (年齢:50歳, 出身地:遼寧省瀋陽市, 在留資格:永住権, 配偶者国籍:日本, 子供:1人)

私が陸前高田に来た時に、市内に住んでいたお嫁さんが合わせて30人前後でした。2011年の震災発生後、十何

人しかいませんでした。帰国の原因がそれぞれですが、中国の都市から日本の農村に移住して慣れないから離婚する人もいるし、夫の家族が優しくないから帰国する人もいます。日本に来てから私もカルチャーショックを受けました。日本で毎日お風呂に入る時に、お嫁さんが最後に入って、家族全員が使っちゃったお湯に入ることが、(日本に)来てから始めてあった。中国で都市でも、水道料金が高いため、普段はシャワーだけで、お風呂を使う人がほとんどなかったが、私がそのような習慣を本当に理解できなかった。最初に夫の両親が使ったお湯を捨てちゃうと、夫の父が怒ってしまって、お嫁さんに「帰ってくれ!」と叱って、日本に来てただ1か月のお嫁さんがそのまま帰っちゃった人もいます。衝突することがあったら、通訳できる人がないから、お嫁さんが本当にかわいそうと思った。うちは、夫の両親に説明したら(両親も)理解してくれた。でも、私が知ったところ、このような文化の違いの原因で離婚してしまった人が多い。もう一人のお嫁さんの話ですが、中国の東北地方で寒い時期に入ったらオンドルを使って匂いあまりないですが、陸前高田に来て、石油を燃やすストーブしかないで、妊娠したお嫁さんが石油の匂いを嗅いだら吐き気を催し、我慢できなくて、夫が暖房を買うお金がないので、お嫁さんが赤ちゃんを下ろして帰国した人もいました。夫の家族が優しいかどうかすごく大事ですよ。

私が来日してから25年目になりました。永住権をとってからまだ3年です。永住権をとって変化などあまり感じてなかった。私の状況は、日本で子供を産んで、家庭を作ってちゃんと時間通り税金を払ったら、ビザの更新がすごく便利で、入国管理局に行かずに、郵送で手続きを完了できます。しかし、今回の震災があって、帰化した人、いわゆる日本の国籍を持つ外国人が大変そうなことがあったようです。私のような永住権を持った中国人は、駐日中国大使館が安全確認を行う際に帰国補助をもらったし、子供も連れて戻れました。帰化した人は、元の国と関係なく、援助対象外になり、日本人ともうまく交流できなくて、日本人として認められなくて、厄介な立場に位置付けられた。多くのお嫁さんが子供や財産のため、帰化しましたが、結局帰化しても何も保障できなかったです。帰化や、永住権は私にとってあまり意味がないです。家族以外周りの日本人との交流が少ないので、国籍からもたらす変化といえば、あまり変わらなかった。外国人として取り扱います。日本はずっとそうだったと思いますが、政治がどうなるかと、民間交流と別だと思っています。政治的に偏見をもっている人がもちろん

いますが、それは仕方がない。マジョリティの人が理性的に扱うと思います。私にとって、日本人が政治に関心がない人が多いです。みんなが目しているのは、税金が増えるかどうか、戦争があるかどうかなどのことです。ただの権利や義務から考えると永住権の方が、もっと気にしなければならぬかもしれません。たとえば、私は違法行為があったら、あるいは運転している自動車で事故が発生したら、自分の在留資格にとって大きな影響を与えます。このような同じ程度のことで、日本に帰化した中国人は日本の法律で、処分しますが、永住権を持っている私は中国大使館と入国管理局により、介入しなければならない。だから、永住権があっても、よその国に住んでいる私が、もっと気をつけなくてはいけない。何か違法行為が発生したら、まずは強制的に戻されるかもしれない。

私の息子は中国語が全然話せなくて、英語ばかり夢中ですが、中国語を勉強させると、ずっと抵抗しています。この点について、私がずっと気にして、悩んでいます。夫も中国語が話せなくて、ただ「你好」(こんにちは)、「再見」(さよなら)ぐらいです。

私は遼寧省瀋陽市の出身です。32歳に日本に来て、夫が2歳上です。夫と瀋陽市で結婚して、私を日本に連れてきました。夫が建築の労働者です。震災が発生してから、私が仕事をやめて、今まで働いていないです。しばらく前、私が陸前高田の在日中国人女性の復興カフェを主催しました。お母さんが子供を連れて、震災後の希望について一緒に話しました。自分のニーズや、不用品の交換や、陸前高田に対して、気になるところなどについて、意見交換しました。ニーズがいろいろですが、震災に対しての希望といえば、政府が鉄道や工場などの建設を重視してほしいです。今の陸前高田に対して、気になるところは、行なっている工事の事です。今の工事はばらばらになっている気がするので、計画性が欠けるのではないかという疑問があります。子供が遊べる場所を無くしてしまい、いろいろところで同時に工事を行なうと、ほこりがたまって部屋が掃除しても汚い。今、百貨店があまりなくて、日用品や食料品以外の買い物できる場所が少ない。

3月に震災が発生して、避難所で5日間いました。毎日食事を2回提供されて、やる事がなくて、ラジオを聴くことしかなかったです。毎日ラジオを通じて地震状況と津波情報を確認していた。偶然で中国人アナウンサーの番組を聞いて、すごく感動しました。その番組で、皆が笑ったり、話したり、当時悲しい私を慰めました。こんな災害があって、逃げるところもないし、残っても、

絶望な気持ちが禁じられなくて、1日の食事まで保証できなくて、追い詰められていました。陸前高田は新幹線が通じていないので、物資が陸前高田に届けるまでは時間が結構かかりました。しかも、当時お姑さんが脳出血で避難所に住めなくなったので、私が戻って、家を少し後片付けてから、家族と帰りました。その時、ラジオが私を支えてくれて、生きられたら、絶対希望があると思いました。だから、復興ラジオ（陸前高田災害FM）を設立する時、私も応募しました。他の人に助けってもらって、恩返しするように、私も他の人に助かってほしい。ラジオの番組も楽しかった。私が担当した内容としては、復興の感想、子育てなどの面白いことでした。

5月に水道がまだ修復しなくて、息子は熱があって、水が足りないと結構困りました。電話は6月から使える状態になって、家族との連絡がそこまでずっと切れた状態が続いていた。8月に中国の大使館から7万円の支給をもらってから、子供を連れて帰国しました。

この辺に住んでいるお嫁さんたちは大体知っています。でも、私のような明るくて交流が好きな人があまりいないですね。私はずっと日本に住んでいて、楽しかった。他人を助けることが嬉しかった。実家の冬は寒すぎて、私がもう3年帰られなかった。息子が中学校に入ってもっと忙しくなったので、帰るのがもっと難しくなった。夫が優しくしてくれて、夫のお父さんが私の番組が好きなので、番組をやったから家族全員が応援してくれます。津波の前は、私がずっと工場で翻訳をやりました。給料もいいし、人も優しいし、すごく楽しかった。津波が発生して、工場が流れてしまい、仕事を無くしてしまいました。陸前高田は私にとって、信じられるところです。これから日本語能力試験を受験して、資格をとってから就職するつもりです。でも、能力試験の質問が難しく、日本人の夫であっても、説明してくれなくて、合格できるかどうかちょっと心配しています。

私が人に微笑みをもたらすことが大好きですので、地域のイベントに良く参加しています。Facebookで自分の生活の記事をアップデートしながら、たくさんの友達と出会いました。陸前高田で企画したイベントが常にFacebookで宣伝しているので、私も良く申し込んでいました。私にとって毎日楽しくて暮らせることが一番大事なので、毎日笑えば、どこでも過ごせると思います。居場所だと、災害FMが震災で落ち込んでいた私に元気をもたらして、居場所だと思います。これからも、頑張っラジオの番組をもっとたくさんの人にハッピーな時間をもたらすように頑張りたいです。

悩みだと、今息子が思春期に入って、抵抗心を強く感

じることです。元々私が災害FMをやるときに息子がサポートしてくれて、友達にお母さんのことをよく褒めていたが、現在自分がハーフであることを気づき、気になっています。私が中国語を話すと、私に「黙れ！話すな！」と叫んだり、離れたります。私が息子にストレスをあげないように、必要ではないことについては全然責めずに我慢しています。最近だんだん悪化していくような気がする。夫はただ普通のことだと思いますが、しかし私が自分に圧力をかけています。

④ G氏（年齢：49歳，出身地：黒龍江省ハルビン市，在留資格：永住権，配偶者国籍：日本，子供：1人）

1997年に日本に来ました。親戚の友達が紹介してくれて夫とお見合いして、大使館で手続きを行ってすぐ日本に来ました。紹介人が中国人であり、自分もお嫁入りで日本に来ました。実は紹介してもらった人が登米市に来る前に何もわからずに来てから、一時帰国の間に、私と出会い、日本の生活を良く褒めていて、当時の私が離婚したばかりで、このまま実家に住むと恥ずかしいと思ったから、紹介人に依頼したら、今の夫を紹介してくれました。その後、紹介人が離婚して帰国したので、今連絡も切れてしまいました。私の年代は円高の年でした。夫からもらった結納が、当時の私にとっては結構の大金でした。

日本に来て確かに紹介した通りにお金もあるし、部屋もある。でも一つ気になるところは、交流できる人がいなくて、寂しかった。紹介人は、その後続いて何十人もこの辺に紹介して来ました。お嫁さんを迎えてくれた日本側の家族からたくさんのお金をもらったようです。日本語を話せずに日本に来て、旦那さんとただ2・3回あったうちに結婚して、落ち着いたたら考えると自分が受け入れられなくて、毎日泣いたり、叫んだり帰国したかった。結婚しても、夫との間に感情が生み出せず、交流もできなくて、また20代の自分がかわいそうと思って、しばらくお金稼いで帰国しようと思いました。最初に日本語が全然わからなかった時、「御手洗」も言えなくて、動作で真似しながら、「御手洗に行きたい」と表現しましたが、夫が「トイレ？」と返事してくれても、何を言うかはわからなかった。一年をたってから、私がトイレという単語が始めて書けるようになった。

1990年代に私が住んでいる町に来た中国人が少なくて、もしどこで中国人と出会ったら、全然知らない人であっても、声をかけてみました。二人きりで話して、お互いに慰めて、面白かった。来日から23日目後にバイトを始めました。自転車に乗って通勤を始めた。電子部品を生

産する工場でした。部品の組み立て生産ラインで、手作業をやりました。出産まではずっとバイトを続けていました。妊娠した時には多分若いから、疲れたなんて感じてなかったのですが、7か月頃までやり続けました。

1998年に娘を出産して、今は17歳で、高校2年です。可愛い娘を出産して、育てて、3歳までに私が帰国したいという思いがだんだん強くなった。でも夫の家族がずっと優しくしてくれたので、私が帰国したら、夫と娘がかわいそうと思って、帰国しないと自分がかわいそうと思って、ずっと迷いながら、数年が経ちました。でもいつか帰国しようと考えていますが、もし私が娘を連れて帰国したら、夫が一人一人になって、娘もお父さんがいなくなった。娘を日本に残して自分が帰国したら、娘はお母さんがいなくなって、どっちでも円満になれなくて、自分が我慢するしかできない。

今振り返ると、当時の紹介人が私たちに嘘をつきました。日本のいいところだけ、言ってくれて、私を夫に紹介したら、80万か100万くらい夫からもらいました。来る前に紹介人がお金をもらったことが全然知らなかった。来てから落ち着いて考えると、紹介してもらってありがたいですが、お金をもらうかどうか私とあまり関係がないじゃないですか。私は理解しましたが、H氏(中国から国際結婚で来日したG氏の知人)が紹介人と喧嘩しました。当時の私たちは日本語がはなせなかったのだから、夫もなんにも言ってくれなかった。中国の慣習で、お嫁さんは結納がもらえるはずなので、その分だけもらいました。私とH氏が一人ずつ50万円をもらいました。当時の普通の中国家庭としてはすごく大金でした。

日本に来る前に私が中国で離婚したばかりです。いつか環境を変えようと思って、紹介人を頼みました。中国で兄弟姉妹は5人います。私が一番年下なので、両親がすごくかわいがってくれました。前の夫と離婚してから9か月を過ぎて、家族に迷惑をかけないようにと考えて、何か出かけるきっかけを探しました。80年代に離婚することが珍しかった。そのまま実家に住むと噂も出ていてあまりよくなかった。困っていた私がちょうど当時38才の夫と出会い、年齢など相応しいと思って、すぐ夫と結婚しました。ずっと都市に住んでいた私が急に農村に入ると、ショックを受けました。泣いたり叫んだり、慰めてくれた夫に迷惑をかけました。「もし娘を産まなかったら、絶対帰しちゃったよね」と夫がよく言います。今だと私はずっと日本に住むつもりがない。娘が大学を合格したら、私が帰国したいです。半年ずつ日本に住んだり、中国に住んだりと考えています。お父さんを亡くしてしまい、お母さん一人で暮らしているのだから、かわいそうと思

うからです。二人のお姉さんが両親の面倒を見てくれましたが、十年前に一人のお姉さんが日本にお嫁さんに来ましたので、家族で今すごく寂しいです。周りのお嫁さんが姉妹二人、三人で日本にくるケースが多いです。

うちで文化の違いとかあまり感じていなかった。お姑さんがすごく優しく、いろいろ考えてくれました。ただ娘が3か月の時に帰国するため、お姑さんがお金を出したくなくて、ちょっと不愉快なことがありましたが、私のせいなので、すぐ仲直りしました。それ以外は喧嘩とか不愉快なこととかあまりなかった。ほかのお嫁さんと比べて、私が満足しています。私の給料はずっと自分で使います。

娘が夫との関係が(私より)もっと近い気がする。中国語を全然話せなくて、日本語で自分の考えをどんどん言ってくれます。私の日本語が下手なので、たまに私が何か言おうとしても、通じられなかった。娘は私によく甘えますが、学校で何があったら、先に夫に話します。20年いると、私は日本語をわかるけど、発音がよくないから、話すのが時々恥ずかしいと思った。日本語を教える人がいないので、娘が3才の時から、彼女の発音を真似て日本語の勉強を始めた。会社で何かあったら、私がメモして、帰ったら自分で調べる。娘がどんどん大きくなって、これからだめだと思って、本を買って、自分が勉強し始めた。大変だと思う時に、本当にやめてから帰国したいけど、娘がいるので、もうちょっと頑張ろうと自分を励ましながらかわいそうと思って、我慢しました。私の紹介人は日本の夫と離婚して一人で帰国しました。残した子供がかわいそうと思った。年配のお祖父さんとお祖母さんがあまり面倒を見なくて、お父さんの仕事が忙しいので、迎える人もいない。周りの子が「臭い!臭い!」と言いますが、娘にはやめさせました。「お母さんが帰っちゃったから、介護する人がいなくなり、かわいそうなので、彼に傷つくことを(言うのを)やめなさい」と娘に言いました。このようなことを見て、もっと自分が帰られないと思った。

IV 考察と結論

1. 来日の経緯の差異による相違

このインタビューを通して、同じ在日中国人女性といっても、留学で来日した女性と、国際結婚により来日した女性との間には、大きな落差があることがわかった。

留学で来日したA氏、D氏は、日本で結婚する前、つまり自分のホームを作る前に一人で留学生として暮らした経験があるので、日本社会を居場所として認識しやすかったと考えられる。また配偶者は中国人であり、日本

での暮らしは忙しく大変ではあるが、それなりに生活設計ができています。子供をバイリンガルで教育して、将来は海外に送りたいという、コスモポリタンな志向性を持っている。日本の良いところ、悪いところ、中国の良いところ、悪いところ、両方を冷静に見つつ、中国と日本の二つのホームを兼ね備える今の自分の立場を肯定的に捉えている。彼女たちは、日本の教育を受け、友達を作って、アルバイトや就職を通して日本社会へ参入する過程の中で、積極的に日本的な特徴を身に付けたともいえる。彼女たちは、中国人の夫と出会い、日本で定住することを決めるが、夫が経済的な能力を持ち、言語や文化などの面で日本社会に適応した経験があったことが、日本と中国の二つのホームを持つことを可能にしていると考えられる。ただ彼女たちは、将来帰国するかどうかに関しては躊躇している。そこには両親を介護するためにいつか帰国すべきという感情と、子供の教育のため日本に滞在したいという思いの間の葛藤がみられる。

これに対して、国際結婚により来日したF氏、G氏は、日本語を習得せず来日後、言葉が通じないことで、大きな疎外感を味わっている。F氏は、建設労働者として働きに来た夫と自らのホームである瀋陽で出会っているが、G氏（本稿では紹介できなかったがH氏も同様に）仲介者によって紹介を受けて、日本の家に嫁いだいわゆる「農村花嫁」である。来日まで都市の生活しか知らない彼女は、古い習慣が残る日本の農村の家に「嫁」として入ることで、言語が十分通じていない家族との間に隙間が生じ、現在の生活の場所をホームとは捉えられていないのが現実である。

F氏は持ち前の明るく積極的な性格で仕事を通して、家庭以外の場所（災害FMなど）に関わりを持ち、自分なりの居場所を構築し、地域社会への意見も持ち、陸前高田を自らのホームと感じつつあることがうかがえる。しかしG氏は、日本の家族にも疎外感を覚え、家庭や地域社会を居場所やホームとは認識できていない。中国に帰りたいという思いを抱きながら、それもできず、中国と日本という二つのホームの狭間に落ち込んでしまっている。それでも子供のために我慢している。F氏もG氏も子供は中国語を話そうとせず、母親との間には距離が生まれている。

2. 日本の多文化共生政策への示唆

日本における在日中国人女性たちは一般的に日本の地域社会との接点が弱い。国際結婚により来日した女性たちは日本人の友達がほとんどいない。日本人と話すのはただ同じバイトや勤務先の日本人だけであるというよう

なケースが多い。F氏のような例もあるが、一般に国際結婚により来日した中国人女性の多くは家庭内のことに集中し、周りの地域社会内の交流と付き合いに対する希望が弱い。数年間日本で生活しても、日本語を話せない、また会話程度はできるが、読み書きを苦手とする人が多い。この現実、地域社会に対してさまざまな示唆を与えている。どんな経緯で来日したとしても、外国人をただ受け入れ、在留資格を与えるだけではなく、外国人の立場で言語教育を受けられる場を作って、日本社会と交流することができる「鍵」を渡すべきではないかと思う。F氏の話に登場する、日本語に通じていないお嫁さんが交流できず離婚したことから見ても、日本語の習得は彼女たちが居場所とホームを構築する上で、重要な要素である。また自治体やコミュニティに通知だけではなく、外国のことをよく理解でき、日本人の立場だけではなく外国人の立場も加えて、問題を仲介できる役割を果たす人の存在が必要である。

日本の家に「嫁」として入った女性たちの孤独感は大きい。今回インタビューした農村花嫁たちの多くが、来日してから20年が経とうとしても、地域社会と密接な関係を持っていないというのは衝撃的ともいえる。母親が日本とつながる上では、子供達を通じて日本との関わりを高める強い希望が見られる。一方で、子供が思春期に入ると、母が中国人であることを負い目に思うようになっていたり、母が中国語を話すことに反感を覚え、「うるさい、黙れ」という言葉を投げかけられたりすることになる。こうした在日中国人女性たちの切実な孤独感や苦境は、日本社会に共有されているとは思えない。

現在日本で外国人の受け入れ政策を推進する中で、現実にどれほど外国人と共生していこうという体制がとられているかは疑わしい。国際結婚により、「日本の国民」と認められ、永住権を獲得しただけで、日本に生まれ、日本で育った外国につながる子供が、国民として受け入れられているのかには疑問がある。

筆者は、「日本人に外国人と共生していくだけの覚悟があるか」どうか問うてみたいと思う。覚悟といえば大げさかもしれないが、要するに外国人との間で多少のトラブルやカルチャー・ショックを引き受けていく心構えがどれ程あるかどうかである。日本社会の中で、マイノリティが声を上げることは難しい。マイジョリティである日本人の側が積極的に彼らに手を差し伸べていかないと共生社会の実現は難しいように考えられる。

謝辞

本稿は、2016年度にお茶の水女子大学大学院博士前期課程地

理環境学コースに提出した修士論文の一部を編集・修正したものです。この二年間を振り返って、自分が着々と成長してきているように感じられます。論文を最後まで親切に指導して下さった指導教官の熊谷圭知先生に、衷心より感謝を申し上げます。学術研究の仕方をはじめ、人生の経験など、いろいろなことを教えて下さった熊谷先生には、感謝の言葉しかございません。合同ゼミの発表で貴重なご意見をいただいた副指導教官の水野勲先生、宮澤仁先生に、長谷川直子先生にも感謝を申し上げます。インタビューのご協力をくださった10名の方々、岩手県陸前高田市のフィールドワークを行う際にサポートして下さった小川杏子さん、本当にありがとうございました。

また修正すべきところは多いですが、今後の課題として頑張っていきたいと思います。最後に、恥ずかしながらも、いつも支えてくれた家族に感謝の気持ちを表したいと思います。

文献

- 浅井亜紀子 2006. 『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』 ミネルヴァ書房.
- 阿部 洋 1983. 『日中教育文化交流と摩擦』 第一書房.
- 井口 泰 2001. 『外国人労働者新時代』 筑摩書房.
- 石井由香 2003. 『移民の居住と生活 グローバル化する日本と移民問題』 明石書店.
- 岩崎信彦・ケリ・ピーチ・宮島 喬・ロジャー・グッドマン・油井清光 2003. 『海外における日本人、日本の中の外国人』 昭和堂.
- エリクソン, E. H. 1973, 『自我同一性-アイデンティティとライフサイクル』 誠信書房.
- 梶田孝道 2001. 『国際化とアイデンティティ』 ミネルヴァ書房.
- 江崎泰子・森口秀志 1988. 『「在日」外国人35カ国100人が語る日本と私』 晶文社.
- 熊谷圭知 2015. 現代日本の社会経済変化と男性/性の変容をめぐる議論—「場所」と「ホーム」の視点から. ジェンダー研究18: 87 - 98.
- 駒井 洋 2002. 『国際化のなかの移民政策の課題』 明石書店.
- 駒井 洋 2006. 『グローバル化時代の日本型多文化共生社会』 明石書店.
- 駒井 洋 2002. 『国際化のなかの移民政策の課題』 明石書店.
- 駒井 洋 2006. 『グローバル化時代の日本型多文化共生社会』 明石書店.
- 実藤恵秀 1981. 『中国留学生史談』 第一書房.
- 中央教育審議会 2003. 『新たな留学生政策の展開について』 中央教育審議会.
- 陳 舜臣 1996. 『日本人と中国人』 文化芸術出版社.
- 野元千寿子 2005. 『留学生に対するビジネス日本語教育』 昭和女子大学.
- 潘 興明 2011. 『移民問題国際比較研究』 上海人民出版社.
- 福田珠己 2008. 「ホーム」の地理学をめぐる最近の展開とその可能性. 人文地理60(5): 403-422.
- 法務省 2006. 多文化共生の推進に関する研究会報告書. (http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf)
- 法務省HP 在留外国人統計. 2016年6月. (<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001161643>)
- 松本 康 2004. 『東京で暮らす—都市社会構造と社会意識』 東京都立大学出版会.
- 宮島 喬 2003. 『共に生きられる日本へ—外国人施策とその課題』 有斐閣.
- 依光正哲 2005. 『日本の移民政策を考える—人口減少社会の課題』 明石書店.
- 労働政策研究・研修機構 2013. 「諸外国における高度人材を中心とした外国労働者受け入れ政策—デンマーク, フランス, ドイツ, イギリス, EU, アメリカ, 韓国, シンガポール比較調査」 JILPT資料シリーズ.
- 吉岡益雄・山本冬彦・金 英達 1989. 『在日外国人と日本社会—多民族社会と国籍の問題』 社会評論社.
- 吉田容子 1996. 欧米におけるフェミニズム地理学の展開. 地理学評論69(4): 242-262.
- Blunt, A. and Dowling, R. 2006. *Home*. London: Routledge.
- Basch, L., G., Nina, G. S. and Szanton, C. B. eds. 1994. *Nations Unbound*. New York: Gordon and Breach.
- Cresswell, T. 2004. *Place: A Short Introduction*, Oxford, Blackwell.

ちん・しう (2015年度博士前期課程修了)
アルビオン (株)

The Spaces and Homes of Chinese Women in Japan: An Analysis of their Life Histories

CHEN SIYU (ALBION Cosmetics Co.,Ltd.)